

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	佐藤麻衣
論文題目	戦前期のニューヨークの日本人社会とメディア研究
論文審査担当者	主査 坂口満宏
	審査委員 本田毅彦
	審査委員 峯村至津子
	審査委員 金澤哲

本論文は、新聞・雑誌の活字メディアに加え、絵画や彫刻などの美術作品とその展示をもって、言語の枠組みを超えて意思の伝達を可能とした媒体とみなすという視点のもと、戦前期のニューヨークにおいて日本人によって発行された複数の日本語新聞や英文雑誌を研究資料の根本に据え、そこに記された日本人移民による文芸創作活動(移民地文芸)の実例と日本人美術家による芸術活動(美術作品)・美術展覧会に対する批評を考察することで、アメリカに渡った日本人による「異郷」の地での創作活動の展開過程とその歴史的意義を明らかにするものである。

本論文の成果として評価すべき点の第1は、戦前のニューヨークにおいて日本人によって発行されていた日本語新聞、日本語雑誌にとどまらず、英文雑誌を含めた徹底的な資料の調査収集をおこない、これまでの研究の空白を埋め、史実の特定に成功していることである。

なかでも1907年に発行された雑誌『太西洋』(太の表記は原著通り)については、永井荷風の「一月一日」(『あめりか物語』所収)の初出掲載誌として、すでにその書名は知られていた。学位申請者はニューヨーク市立図書館において『太西洋』の第1号から第3号の所蔵を突き止め、その第2号の編集に中村春雨と田村松魚が携わっていたこと、そしてそこに永井荷風の「夜の女」、同第3号に「一月一日」が掲載されていることを見出した。さらに『日米週報』の調査を通して、その広告欄に『太西洋』第4号の目次を見つけ、そこに初出誌未詳とされていた永井荷風の「落葉」の掲載予告があったとした。

このように本論文には、作家研究、人物研究を進めるに際しては、何よりもまず、当該研究に不可欠となる根本資料の徹底的な収集と史実の特定作業を遂行するという姿勢が貫かれており、その姿勢は日本語新聞の悉皆調査によってアメリカ滞在時の田村松魚の動静を明らかにしようとしたことや、若き日の石垣栄太郎が残した文芸作品を掘り起こすという作業にも通底している。

評価すべき点の第2は、アメリカにおける日本人社会とホスト社会との関係を把握する視点として、両者をつないでいた媒体(メディア)を包括的に捉えることの有効性を提起したことである。通常、20世紀中ごろまでの媒体(メディア)といえば新聞や雑誌など活字メディアを指定するが、本論文ではそれらにとどめず、絵画や彫刻などの美術作品そのものをもって、言語の枠組みを超え意思の伝達を可能とした媒体(メディア)と定義し、これを歴史分析の視座としたことである。

美術作品を媒体（メディア）と定義することによって、作品を展示する展覧会そのものが更なる媒体（メディア）となり、作品と展覧会の成果を評する新聞や雑誌の記事がメディアに位置づくことみなしていく。このようにアメリカにおける日本人社会とホスト社会とを媒介するものに美術作品を位置づけたことにより、本論文における重要な研究課題が、ニューヨークという地において、1920年代から40年代にかけて日本人画家たちが参画したさまざまな展覧会の実態を復元し、その変遷をあとづけていくこととなったのである。

展覧会の実態を復元するためにとられた方法が、各種展覧会の出品目録の悉皆調査と収集であった。しかし簡略に記載された目録だけでは作品の特徴や構図を特定しえないため、調査対象は日本語新聞に掲載された作品批評はもとより、英字紙に掲載されたそれへと及んでいく。さらに出品作品の構図を明示するため、現存する作品については所蔵施設において、それ以外については図版からの複写をおこない、徹底的な画像集積を達成した。その成果が資料編に収録された図録である。

こうした研究の視点と方法によって、戦前期のニューヨークで活躍した日本人画家といえば、国吉康雄や石垣栄太郎といった、著名な画家の人物研究や個別作品研究に偏りがちとなる研究状況を相対化し、国吉や石垣たち以外の個性豊かな日本人画家、日系二世画家たちの存在を見出し、歴史的に位置づけることを可能としたといえる。

このように本論文には新たな研究の視点と手堅い基礎作業の成果が随所に示されているが、いくつか検討を要する点があったことも指摘しておかねばならない。

その第1は、論文の題目において「戦前期のニューヨークの日本人社会」と掲げているが、本論文の全体を通して、かつてニューヨークに存在した日本人社会そのものの実態分析がなされていないことである。ニューヨークに在住していた日本人によって組織されていた日本人会については言及されているが、その内実や日本人社会の生活実態、コミュニティを構成していた人々の職業や関係性については、中心的な論点とはなっていない。

第2は、日本人芸術家たちの帰属意識分析が表面的であることである。彼らの帰属意識の推移という点においては、作品分析を通して作風や題材に変化が見られたとし、その作例を明示している。しかしその変化の要因分析にあたっては、アメリカで師事した画家との出会いや当時流行していた絵画技法の受容、日本の中国侵略に対する抗議活動といった外在的な要因を示すにとどまっている。この点を深めるためには、画家たちの心情を表明した手記や書簡、政治意識を高めることになった現状認識やイデオロギー、交友関係の実態分析など、さらなる考察を求めたい。

最後に最終試験（試問）において指摘されたことをいくつか記しておく。

一つ目は、アメリカにおける他の移民社会やエスニック・グループとの比較を可能とする理論的な枠組みの提示がみられなかったこと。二つ目として、基礎的資料の発掘によってこれまでの研究がどれほど書き換えられるのか、ということ。三つ目には、1920年代のアメリカ文化の特徴をとらえるにおいては、白人たち主流社会の間に、一方で排他的でありながら他方で黒人やアジア系のものをエキゾチックなものとして取り入れようとしていたことが流行っていたことから、そうした視点から美術批評を読まねばならない、という指摘である。これらはいずれも、本論文の成果を踏まえたうえで、今後の学位申請者に対する期待ともいえるものである。

以上のことをふまえ、論文審査担当者一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。